

民間人の発想で不毛の台地を開削

つづき やこう
— 大酒造家で地主 都築弥厚 —



弥厚翁肖像画 画 谷口東溪



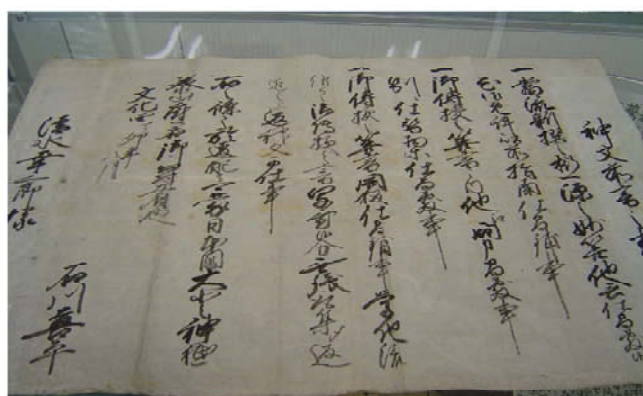
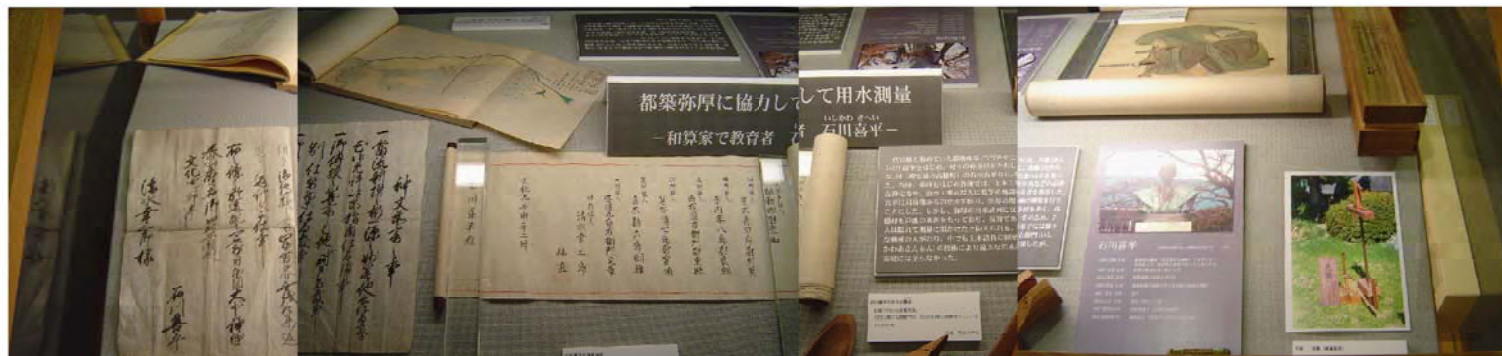
弥厚翁 愛知県碧海郡教育会編 1915年刊

明治用水がつけられる前の矢作川右岸の洪積(こうせき)台地は、松がたくさん生い茂り、キツネの住みかになっていた未開の台地であった。人々は散在するため池の水や、地下水を田に引いて、わずかな水田をつくっていた。

この地で酒米をつくり、酒造業を営んでいた都築弥厚(つづきやこう)(現安城市和泉町)は、酒米を安定的に増産するため矢作川から水を引き台地を開拓することを思いついた。和算家石川喜平(いしかわきへい)(現安城市高棚町)の協力で測量を行うなど、弥厚は私財を投じて計画し、江戸幕府に願い出たが、病で倒れ、実現しなかった。

都築弥厚に協力して用水測量

いしかわ きへい
— 和算家で教育者 石川喜平 —



石川喜平神文前書之事 1807年



石川喜平手作り算木

代官職も勤めていた都築弥厚(つづきやこう)は、芦池(あしいけ)論争をはじめ、村々の仲介役をと
おして、高棚(たかたな)村(現安城市高棚町)の石川喜平(いしかわきへい)を知った。当時、幕府を
はじめ各藩では、土木工事や年貢などの必要な勘定方や、治水工事の役人に数学の知識のある者を登
用した。喜平は刈谷藩からの登用を断り、弥厚の用水計画の測量を行うことにした。しかし、弥厚の
用水計画に反対する村も多く、高棚村も芦池の水利をもっており、反対であった。そのため、2人は
隠れて測量に出かけたと伝えられる。喜平の弟子には様々な職種の人があり、中でも土木請負の棟梁
石川浅右衛門(いしかわあさえもん)の技術により遠大な用水計画は完成したが、実現には至らなかつ
た。